「田村麻呂の兵隊が、鹿が峯をたって長沢を登り万蔵が池で休んでなあ、あと一息で日隠山につくというところで、何かに驚ろいた田村麻呂の馬が脚を踏みはずして、あれよあれよという間に、熊笹の崖を滑りおちて、ヒヒンと悲しげに一声嘶いたきり死んでしまっただそうな。」

「あんたは板付観音に行ってみたこがあるかい。――あれはなあ田村麻呂の馬が死んでから、馬を引いてあそこを通ると、遥かな谷底から悲しげな馬の嘶きが聞えて来て、引き馬が吸いこまれるように崖から転び落ちて死ぬもんでなあ、みんなで話しあって観世音をまつって馬達の霊を祈ったのだと。……」

里人たちに板付観音と呼ばれて来たこの観音は、今も標高五〇〇米を越す山頂の小径のかたわら一丈余の切り立った自然の岩石に、「馬頭観世音供養塔」の八文字が刻まれ、こけむした碑面の右上部に大同元年……、左に十一月吉……。の文字が幾星霜の風雨にたえて通う人もまれな旧会津街道に鎮座し、山上からこんこんと湧き出る参詣清水は絶えることがありません。

「今は無くなったが、もとは参詣清水のてまい桜窪の一の鳥居があっただよ。」

古老はこう付け加えました。